

湯西川溫泉誌





# 湯田川溫泉誌序

西田川郡、溫泉有三矣、湯田川也、溫海也、湯野濱也、鼎足並立、不相

下也、溫泉之質、雖殊其趣、各從病浴、至愈其病、其歸一也、學士之所

論、豈不著明哉、凡人之浴於溫泉、唯療病而已乎、散其悒鬱、在使樂

心也故欲樂山水者、豈非溫海耶、溫海、在於谿間、以富於山水也、

飲食鮮魚、豈非湯野濱耶、湯野濱、瀕於西海、以饒於鮮魚也、而湯田

川、雖非不接於山、而有高嶽也、雖非無流水、無有大河也、而况遠於

海耶、然而與溫海、湯野濱、鼎足並立、不相下者、抑何為耶、是無他、

眼之所樂、固有限也、口之所嗜、亦有限也、故假令雖無鮮魚、雖乏山





水、浴客心意、最樂且安、無有其限者、蓋非客舍之歡遇耶、去年之震  
災也、傷者、病者、實爲少哉、田川客舍、直告於震地曰、傷者、病者、速  
可來浴、非常之災、何受其酬乎、以此一端、平生歡遇之厚、夫可概也、  
非以所繫昌耶、湯田川温泉誌、今茲刻成、求辨一語於卷端、因書、

明治二十八年三月 一樽居士 松本十郎

湯田川温泉誌自序

本誌は素と生が倉率の筆に成ると雖ども然れども其の之れ  
を成さしむるは實に田川は繁華に在り蓋し文章は事物の顯  
象を描寫するの具なり事物の顯象にして有るふと莫からん  
乎遂に之れを描寫するに文章無けん田川の温泉之れ有るか  
故に此書を出たす豈に夫れ偶然ならんや願ふに今日の世は  
昔日に勢に非らず人文の進歩するふと駸々乎として猶ほ馳  
馬に鞭ちて峻坂を下るが如し若し之れを今より三五年の後  
ちに看ば此書の今日を描寫するも亦た殆んど昔日の事物  
を觀るが如けん但だ今に於て今を言ひ後ちに傳へて後ち  
に益する有らば是れ生が望外の幸榮なるなり

明治二十八年一月一日 政况視察として漫遊の途次  
田川の温泉客舍に於て 萬湖 田賀系 小史 識







神にして天なり唯夫れ天あり神なり病むもの克く治し運る  
 もの克く清む乞ふ其地理を説かんか抑々山川温泉は羽前國  
 西田川郡湯田川村に属す村は郡の西南隅に位し謂ゆる山間  
 の一孤村たりと雖ども須泉有るが故に人馬絡繹幾んど市街  
 地と撰ます西南に路し大日坂を超え田川坂下木野俣を經  
 て新潟縣界に至るべく又た西北に路すれば清水水澤を經て  
 更らに三瀬温泉鼠ヶ原より新潟縣界に入るべく徑路を北し  
 西し長堰端より大山町に出ても下川の善寶寺に詣すべく加  
 茂の春日社を拜し又た海に航し酒田に新瀨に船の行く處其  
 の孰れにも渡るべく北し東し鶴岡町に出て更らに東し藤  
 島狩川清川を經て山形縣地に到るべく横山押切新堀を經て兩  
 山の諸峯に登り詣すべく更らに北し横山押切新堀を經て兩



羽州田川温泉圖



井戸山冷水

雀岡上肴町雲松堂



温泉圖



雀岡上着町雲松堂画并刻

水

温泉

天宮

神社

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉

温泉



羽橋を躡りて酒田港に到るべし地の理既でに然かり海に遠く川に近からざるも鮮魚獲つべく新菜求むへし況んや大山の醇酒之れを得るに易くして田川之美妓居なからに待つべき有るをや名所の訪ふべき古跡の探るべきもの亦た甚だ多し縣下温泉少からず而して田川高評有り其の殷富に温泉の繁華を極むるもの決して故なきに非らざるなり尙ほ記すべきは項を追ふて記せん只だ戸數人口田畑其他を記せば村は元と田川湯藤澤の兩大字より成りて左の如し

戸數百八十三戸

人口千九百九十一人

田百四十一町四反六畝十九步

郡村宅地九町八反八畝八步五合貳夕

鑛泉地五步八合五夕

池沼壹畝二十七步

山林五百八町五反五畝十九步

原野拾五町六反三畝二拾二步

雜種地壹畝十四步



反別合計六百八十一町八反四畝廿二步三合七夕  
地價合計五万九千六百三拾壹圓八拾貳錢貳厘

沿革

往事は今ま知るに由なし寛治年間は源義家之れを領し其後  
目代として其臣藤原清衡之れを支配すと相傳ふ其後田川太  
郎領し之れを子孫に傳へたりと文治年間田川太郎行文源義  
經に隨ひ軍に戦ひ高館陥落の時遂に死せりと云ふ更らに建  
久年間より武藤氏の領に歸し又た更らに天正年間より上杉  
氏に屬し後ち慶長年間より最上家領し又た元和年間より酒  
井氏數代之れを領したりと明治五年酒田縣管轄となり同八  
年鶴岡縣となり同九年來山形縣に轉属す而して温泉は開創  
今に於て詳ならずと雖ども里俗の傳ふる處に據れば和銅

年間地中混々として温泉の湧出するを發見したり時に傷を  
負へる一羽の白鷺銀の如きもの飛ひ下り之れに浴して驗あ  
り幾程もなく何地とも無く復た飛ひ去りたりと是故に之れ  
を稱して鷺の湯と稱し今まの正面の湯即ち是れなり又た  
別に田の湯と稱する有り傳へ云ふ寶歷年間水田に耕作する  
一牛あり偶々眼を患ひ來りて角にて地を叩く湯是れより湧  
き牛之れに浴し病癒へて去れり土人就て地を穿つ幾尺名湯  
を得たり即ち以て稱す而して泉質は正面の湯田の湯皆な同  
一なり尙ほ其詳しきは後記に在り

温泉宿

温泉宿は十六軒あり庶な孰れも内湯有り而して其質其効皆  
な同じ。







一、六四〇グラム（攝氏百八十度の熱にて乾燥して之を含有し  
其成分分量の比例は

硫化水素	少量	石灰	多量	鹽素	少量
酸化鉄	痕跡	硫酸	多量	硅酸	痕跡
加里		炎色反應	著明	曹達	稍多量

明治十九年一月十八日

衛生局東京試験所檢明部長内務一等技手 田原良純 印

檢査主任 内務四等技手 町田 伸 印

### 温泉の効用

温泉の療病に効あるは主として含有する成分及び温度に由  
ると雖ども亦た土地の高低地質氣候空氣の稠度及び乾濕風  
の方向及び強弱雨量海濱住屋交通生活法散步遊戯等即ち外

物及び精神上の關係浴用法服用法等宜しきを得されは其奏  
効を期すへからず然り而して此諸件を詳論せず茲に略す  
温泉の効用は其作用甚た複雑なりと雖ども要するに温度作  
用壓迫作用化學的作用等にして新陳代謝を旺盛し精神及び  
体力を回復し全身諸器の官能を容易ならしむるにあり更に  
之を詳論すれば皮膚の毛細血管は膨脹し血液の運行速かど  
かり心搏進み從て脈數は増加するも呼吸は緩徐深長となり  
身体内部の血液皮膚に流利するが故に内臓の鬱血を去り諸  
器の官能を盛にし全身一般の爽快を覺へ精神安靜となる又  
皮膚の污垢を洗除し老廢の表皮を去り榮養を善長ならしむ  
るを以て其機能旺盛し汗腺の分泌を催進し新陳代謝を良  
らしむ而して温度は華氏百五度乃至百十五度を良しとす



角膜炎 出血 結膜炎 打身  
 カンヒヤウノルイ 脊髄痛 ウキノルイ 打身  
 神経痛 氣管支加答兒 手足ノ痛 喘息  
 シヤクノルイ シヤクノルイ 梅毒  
 月經不良 發疹 血腫 疾 瘧疾  
 ナツツライ カサノルイ シツノルイ ガツチノルイ  
 ヒセン 血ブツク  
 以上の諸症に内用外用共に可なり  
 正面の湯は浴室一棟にして東西六間余南北四間余出入口は

浴室

南北二口あり湯室四個所に備へり  
 中央に木石を以て横へたり  
 一は明治廿七年十月廿二日  
 湧出の湯なり  
 新築したるに於て  
 遊泳するを得るなり  
 又別室に備へり  
 湯室は極めて廣く深  
 く引  
 身を伸して遊泳するを得るなり  
 又別室に備へり  
 湯室は極めて廣く深  
 く引  
 湯室は極めて廣く深  
 く引  
 湯室は極めて廣く深  
 く引

温泉療法通則



論なりと雖も抑々亦た土地の高低氣候の寒暖より浴場の  
 陋美近傍の風景食物の良悪等皆な功を奏するに於て關係  
 なしとせず而して此數多の者悉く之れを備ふものは是れ此田  
 川温泉の特得する所の者たり浴するに醫家の診定を要す但  
 た夫れ謂ゆる無病にして氣保養の爲めあらんに之れを要す  
 るよと莫かるへし  
 鑛泉療法に適するの時期は當温泉に於て凡る二月より十一  
 月に至る間を最良となせども土地の氣候寒暖に因て適宜た  
 るべく又た冬期浴療を爲さんとするにも浴室の構造に注意  
 し寒風の隙間洩るか如きこと無ければ妨げあしとす  
 療病者入浴時日の長短は其人々の體質及び鑛泉感應の強弱  
 に因りて各々異なるべければ之れを定むるは難たし然れど

も一週間を以て一回とし三週間を適度とす尙ほ病症の模様  
 に依り伸縮すへしとす  
 着到早々身体疲勞の儘浴するは宜からず先づ飲食を了へ静  
 息するよと二時間位にして始めて浴するを良しとす而して  
 適當の時間は朝五時六時頃夕七時八時の頃を良しとす飲服  
 後少しく運動を爲すは最も良し  
 入浴は一日四回或は五回六回患者の適宜に由るへし朝は五  
 時六時夕は七時八時を良期とすれど空腹及び満腹の時は共  
 に宜むからず然るに浴度多ければ効能速ならんとの妄想を  
 以て一日數十回の浴を取るさへ有り如期は實に慎むべきの  
 事なるなり  
 入浴の時間は温度及び鑛泉の性質と患者は病性體質とに由



て一樣なるべからず初時は入浴時間を短く漸々長くすへし  
 而して通例七分間より十二分間に至るを良しとす  
 温度も亦た病性體質等に從て同一ならず然れども常温泉は  
 華氏百十五度にして尤も適應の温度なりとす  
 浴後は浴巾を以て全身を拭ひ而して直ちに衣服を着し晴天  
 の日は散歩をなし雨天の時は室内に於て適宜運動するを宜  
 しとす然れども倦み且つ疲れ之を好まざる者は強て爲すべ  
 からず

各地に達する里程

東西南北山車行すべく野徒歩すべく坂を鋤き徑を作りて今  
 や昔の道路ならず而して其の四方に達する里程は  
 鶴岡迄 一里廿二丁餘 酒田迄 八里八丁

大山迄	二里	加茂迄	三里五丁
三瀬迄	三里六丁	温海迄	六里廿二丁
新發田迄	三十四里廿九丁	新潟迄	四十二里三丁
新莊迄	十四里十丁	山形迄	三十二里四丁
米澤迄	四十四里	仙臺迄	三十八里十八丁
東京迄	百廿六里餘	木野俣迄	五里八丁
秋田迄	二十七里廿七丁	青森迄	八十一里卅二丁

官衙及公署

右は浴客の休息及投宿に便せんと記するのみ  
 郵便局は大宇田川湯六十四番地にあり村の南部に位し明治  
 十五年六月一日を以て開始す同十八年十月十四日を以て貯  
 金事務を取扱ふ事となり同廿四年一月十六日を以て爲替事



務を取扱ふ事になれりど而して郵便取扱時間は左の如し

郵便時刻	差立	市内配達人	市外配達人
午前六時三十一分	午前六時三十一分	午前六時五十分	午前六時五十分
午後三時三十一分	午後三時三十一分	午前十一時	午後三時五十分
午後九時四十八分	午後九時四十八分	午後一時三十分	午後三時五十分
午前十時五十八分	午前十時五十八分	午後三時五十分	午後三時五十分
坂ノ下木野俣	山形方面差立		發時刻午前六時五十分

而して爲替及貯金は毎日午前八時より午後四時迄を取扱時  
 問とし日曜大祭日も亦た休暇せずと云ふ  
 村役場は大宇田川湯一番地にあり村北南部に位す曾ては隣  
 村田川に組合ひたるを大宇藤澤と合併し一村を新成したる  
 にて村長は名譽職とす  
 駐在所は西田川郡警察署第二受持區として大宇田川湯百二

十六番地にあり村の北部に位し明治二十年十二月廿五日を  
 以て開設せられ同廿年八月を以て在勤所となり後改正せ  
 られて駐在所となる而して己前は火の往復出入頻繁の故を  
 以て請願調査を置きたる事も有りなり  
 尋常小學校は大宇田川湯百三十一番地にあり明治十五年五  
 月小學校開設同二十年四月尋常小學校と改正す現今の生徒  
 數は左の如し

尋常科 九十五名餘  
 補習科 十五名餘

名所 舊跡

湯花山 琴平神社は村の東南隅小丘に建てる祠堂にして背に  
 山を負ひ腹に野を抱え眺望最とも宜しく北は遙かに島海山  
 北天に沖するを望み村内櫛比れ家墟點々算ふべく又た歩心



て陰ゆべく境園殊に廣く樹木多し就中多きは梅櫻桃の花木  
 にして他に大なる古藤あり楓あり四時遊ふに宜しく春は雪  
 の裡より花を観るべく夏は納涼に藤の花秋は紅葉に茸狩り  
 や冬は漫然夜獨どり行き寒月に嘯くも亦た騷士の興とする  
 所竹筒披らくべく醇酒焚くべく紳士と淑女と田婦庶な  
 以て遊ぶべく遊ふに貴賤老若あし之れを村内第一は勝地と  
 爲す  
 虚空藏山は村より十三四丁餘を隔る南端茗荷澤と云ふ所に  
 あり東は少蓮寺に隣り山色の秀麗能く筆の及ぶ所に非らず  
 而して山は金峰に疊列す西は田田川に境を接し北は曠野に  
 點々村落の散居を算ふべきもの幾百登りて頂上に望めは鳥  
 海山手に撫すべく日本海足に眺るべし祠宇あり虚空藏菩薩

の石像を安置す

馬場山は村より十町餘を隔る北端にあり地境頗る廣く山上  
 砥の如く垣に側に大なる古松鬱たる有り是れ村内名木の  
 一とす四望原野にして樹木なし西に望むは西目の諸村にして  
 此地亦た此地の眺望あり昔は此地を馬術の稽古場と爲す故  
 に馬場山の稱存す  
 岩清水は村の北部にあり樹木森々として蓋猶闊く相傳ふ往  
 時八幡太郎源義家奥州征伐に際し來りて此地に憩ひ携へる  
 弓に岩を割り名水を得たりと今は昔かし酒井公の温泉に來  
 遊せらるる常に御用水と稱へ炊洗皆此水を用ひられたり  
 地境幽邃風物明美加ふるに之れ有り來り遊ふもの殊に多く  
 又た茶人は之を酌して茶を點じ以て同好に誇ると云ふ



天神堂諏訪山は村の北部にあり境地樹木蒼たり意ふに生立  
 幾千の星霜を経たるなるへし根幹枝葉蓋をなし蔭をなし眺  
 望絶佳鶴岡街道瞰下に收むべく藤澤川田川の數流其麓を回  
 り夏時の納涼最とも適ふ  
 石堂山は村の西北部にあり地内老木尤ども多し昔かし某氏  
 の館跡なりと云ふ今まも墟趾存す風光頗る佳四望詩題なら  
 ざるは悉し或は云ふ寛治年間源義家家衡武衡と戦ひ家衡武  
 衡此山に館籠りたりと  
 下山は村の北にあり眺望又た佳く山の頂上は平垣に屯て廣  
 き場所あり地内に大なる古松あり是れ即ち昔か館の庭の  
 松なりと今に傳ふるなり現今頻りに此地を開墾して諸物を  
 産す

雀臺は村より七八丁餘を隔る西端にして南田と云ふ所にあ  
 り昔かし源義家奥羽征伐の際雪中其山に懸りしに積雪の候  
 行路塞かり村家に出るに大に困難の砌り一羽の雀來り止ま  
 り口に小技を術むを見隨者倣ふてかんづき雪路の滑りを防  
 ぐの具にしてかんづきとは方言なりを作り漸くにして村家  
 に出つるを得據りて以て雀臺の稱ある所以なりと此地亦た  
 大なる一松あり最も風致あり  
 田川城は村より十丁餘隔る東北にして字藤澤の地境に在り  
 田川太郎の城墟なり太郎行交より傳へて世々此に居住し文  
 治年間行交戦死し今も輪塔に其跡を遺しぬ但た文字の印す  
 るも苔蒸し石缺け今は殆んど讀むに堪へず又た一本松と稱  
 する有り是は城中に存して行文の愛觀する所なりと土俗は



之を庭の松とも呼ぶ而して其の古きは安政年間天災に焼燼し今に遺るは其形身の松のみ

神社 佛閣

由豆佐賣神社は深澤山の半腹に社祠を建て今まは郷社として郷人の崇拜する所たり三代實録に曰く元慶某年六月廿二日出羽國秋田城中及飽海郡神宮寺西濱兩石鏃陰陽寮言當有凶狄陰謀兵亂之事神祇官言彼國飽海郡大物忌神月山神田川郡由豆佐賣神俱成此恠崇在不敬勅令國宰恭祀諸神兼慎警云々又た延喜式神名帳にも記載し莊内六坐の其内に位する大神なり境内貳町五反歩餘社地に生育する樹木は皆赤根幹枝葉繁茂し幾千年を経たりしや古蒼孰れも稀有の名木を以て稱すべく鳥居より拜殿に至る間は石を以て階段とし其中頃

坂の左右に碑を立つる有り又た清水の湧出する有り其上に一大古木あり即ち著名の田川の銀杏是れなり高さ三十五間餘廻り七間餘にして地上より一丈位の各所に乳房數ヶ所あり婦女の産後乳の不足して困難あるは之れに祈願すべしとなり社祠莊嚴にして社地風致あり例年四月廿日を以て大祭れ日となす

古降神社は同境内にあり眺望絶美宜しき地なり

與喜天満宮も同境内にあり天神靈と云ふ眺望最とも佳なる處にして浴客皆な此地に遊觀す大祭は五月廿五日にして此日近郷より貴となく賤となく老となく幼となく男となく女となく來り詣つるもの頗る多く群集混沓謂はかりなく客舎に宿するもの此一夜千以上の頭數ありと以つて其盛況を量



かるへし當社の北に田川有名の大杉あり高さ三十間餘廻り  
 七間餘昔かしより今まに至る田川大杉と稱するもの即ち  
 是れなり  
 長福寺は大和國長谷寺の末派にして莊内眞言宗五學頭の其  
 一なるあり昔かし源義家奥羽征伐の砌り當山觀音の効驗顯  
 著なるを聞知し奉納する所の三千佛今まに遺れり其他什寶  
 物種々ありしも皆な火災に罹り焼燼したるは憾むへし慶長  
 年間最上義光より百五十石餘の黒印を賜はり當時より藩公  
 酒井家は祈願所として莊内寺院中の高位を占めたり境内往  
 古より大ある芭蕉あり高さ三間餘葉幅尺年に不同あるも大  
 抵は八九尺より一丈以上に及ぶと云ふ  
 昔かし當村に六坊あり 橋本坊 知光坊 大門坊 定林坊

月光坊 長福寺是れあり而して今まに存するは唯ひとり長福  
 寺のみ大  
 長福寺の火災に罹る數回なりしは遺寶物の數少なさに証す  
 へきも猶ほ今まに存するは左の如し

本堂本尊十一面觀音(聖德太子の御作)

脇士 天照皇大神(作者不明) 文珠菩薩(行基菩薩御作)

不動尊 石像大日如來 石像聖觀音(弘法大師御作)

不動尊 地藏尊(慈覺大師御作) 三千佛(惠心僧都御筆)

右三千佛は絹地絹表具の軸物にして三幅對なり長さ八尺  
 餘幅七尺餘一幅に千文字を揮毫したる珍品にして蓋し近  
 縣比類稀れなるならん而して是れ源義家の奉納する所な  
 りと云ふ



十六善神(惠心僧都御筆) 不動尊(鳥羽法皇御書) 高野四  
 所明神 九字曼荼羅 八大金剛童子 愛染明王 獨古  
 彌蛇 大勝金剛 水天(弘法大師御筆) 弘法大師御自  
 書(佐竹の御宗門石塚氏義政殿の寄附) 弘法大師御影(石  
 山觀賢御筆) 十二天(兆服司御筆) 明惠上人 南京 佛  
 觀音(松年基三郎殿寄附)

觀音堂は村の西部にあり十一面觀音を安置し聖德太子の御  
 作あり莊内三十三番觀音は内二十六番の札所なり

産物

當村主なる産物を記せば左の如し  
 米 大豆 小豆 生糸 真綿 麻 桑葉 獨活 茗荷  
 河鹿 孟宗竹 栗 薪炭 西瓜 推草 蕨

雜記

蕎麥 鮎 材木 其他魚類茶物四季絶へず

貴顯紳士の會遊するもの數多し今其主なるを記せば  
 文學博士重野安釋 内務大臣副嶋種臣 華族徳川家達  
 碩儒西尾爲忠 外務次官林董 警視總監折田平内 警視  
 總監三島通庸 商工局長若宮正音 衆議院議員古莊嘉門  
 右の諸氏は孰れも其現當の職務に巡視の際當温泉の他に卓  
 絶なるを賞せんと來られたるにて皆な歎美の贊辭を賜はり  
 たり  
 貸座敷は四軒あり曰く  
 櫻花樓(本間野左衛門) 歌扇樓(大井三太郎) 梅月樓(伊藤  
 幸四郎) 場照樓(芳賀善右衛門)



と云ふ而して場照樓は正面の湯に臨みて建てたる家にして築  
工莊なりと云ふに非らず美ありと云ふに非らず唯た美にし  
て麗なる客間は飽にして優なる抱妓と競ふべく梅月樓は其  
裏手に在り体裁甚だ佳あらざるに非らず而かも云ふ人は云  
ふ今ま少し氣を利かすべしと歌扇樓は同業中の丸持ちなり  
と沙汰せらるるも或は營業上他に論する無からん乎と某粹  
史は唱ふ櫻花樓は三層と高かく名を争ふべき否か樓の隠居  
甚だ風流人なり序てに記す當所蓄ふる所の妓は藝を専らに  
婦人の席にも侍じて歌舞するが故に却つて歌妓として鶴岡  
酒田の花廓にも較へて優れるもの有るか如きは是れ此山中  
の僻村に多とせざるへからざる所の者なりと著者私かに按  
す

田川の馬市は有名のものあり例年七月十五日の頃より一周  
間位は近縣の博食馬を曳き來り市場を開く而して之れを縣  
別にすれば山形新潟岩手秋田青森等にして馬數平年千頭以  
上にして賣買其他幾んど四万圓を超過するものなりと如斯  
盛んなるか故に遠邇に傳へて出て來るも亦た甚だ多く此  
季節には旅舎貸席は他の浴客を謝絶するか如きの賑ひにて  
晝夜に歌舞音曲の音聲を聴かざるは無し願ふに田川の殷富  
亦た是れに依りて其度を増すものならんか  
田川の俄踊は與喜天満宮の祭日に於て行はるるものにし  
て學村業を廢し妍を競ひ美を争ひ男女老幼遊ひ戯れて年中  
に積む心の塵を洗らひ落とす謂ゆる生命の洗濯日なり此日  
藝妓の奉納踊わり猶ほ東都芳原の仁輪賀の如きものとみ



土洗又た繩綯業と云ふは農家の收作を祝し且つ其勞苦を慰  
 するの宴にして二十人三十人各隊を作りて馳せ参し二日三  
 日夜を徹しての浮かれ遊ひに一人の費す所凡ろ一俵米より  
 二俵三俵に及ふも有り云ふ但た其遊ふに度あり年の豊  
 凶に量かると云ふ  
 旅館は孰れも美を盡し座敷の結構莊にして華料理の体裁亦  
 た大都會に比すべく殊に客扱ひに信にして懇あるは當温泉  
 の能として他に勝ざる所呉服屋あり小問物屋あり穀物商わ  
 り散髪店あり割烹店あり繁華此くの如きは蓋し鶴岡に近か  
 く日歸客の出入り多きに依りてならんか  
 莊内のをば謂ゆる遊女は田川を濫觴と爲す傳へ聞く尾浦の  
 城主武藤氏の滅ぶる猶は平家の八島に亡ぶか如く流離して

婦女途に迷ひ田川は幕領易すくは他の奪掠するもど無かる  
 へしと慮かり寄食して此に居るもの多く中に就き艶婦もて  
 稱すへき容貌なるは浴客の座に給仕したるか遂るに枕席に  
 侍するの風を成したるあるへく而して其のをばとは此嬢此  
 嬢何れの産子と問ふも有れば方言妹ををばと呼ふより是れ  
 は拙家のをばにて尾浦に居れるなりと答へたるに基すると  
 或ばをばはちからしなど云ふ其のをばの証まりと云ふも有  
 れと今や攻考すへかあす  
 此に可笑しくも面白き話しは濱中など云ふ海岸の地にて男  
 子十五才どなれば一人前となるの例にて其れするには位  
 取りと云ふも有りて仲間一同は田川に打ち連れて來り大  
 酒宴を張るもどなるか式の次第は遊女を官女などに見立て



とや緋の袴に眞似てか赤の前垂れをひめて上座し客は却つて下座しユ、よろしくの所作ありて既かての歸りには青野紙に遊女の目紅寫したるを幾十枚とさく乞ひ受けて齋らし村よりは坂迎ひどて皆なく出て迎ふる其れに其紙に赤飯包み配分するか披露にて是れにて一人前の男なるなりと而して今ま其型は有りや無しや

附録

客秋政况視察として飽海田川の三部漫遊の客次たま／＼酒田に震災の襲撃に遭ひ轉遊移步鶴岡に來り田川は温泉に入り途突如と名を呼ぶ有り願れば即ち舊友鈴木政三氏あり久潤情を陳へて日を重ねる幾旬時を論し事を談し而て話節温泉誌に及び此著あり而して之れ有るもの實に氏の厚誼に根さし深意に育ちて然かるなり然からずは生か淺見穿開遂るに能くする有らん氏は鶴岡の藩士にして奇骨風采兩なから備ふるの人会つて四方に杖し芳山の芳陵に血涙を澀き湊川の古碑に肚腹を吐き唯た抱藏を人に語らず今まは官に温泉の地に勤む能く民を撫し能く政を布く他郷知己に逢ふは



歡の極まるもの而して此誼此意に此著を成す豈に更らに多  
とじて大いに感謝せざらんや一言以つて之れを爲す亦是れ  
情に於るて心を表するのみ

明治二十八年三月某日刻成る日

辱交 田賀系萬湖謹識

歌詩文

田川温泉沐浴之長歌

八束穂の莫々然足穂れ晚稻刈る田川小國は現在の今の現は  
里廣み饒ひ足はひ足曳の山方まけて由豆佐買の神の宮居を  
宜しくも定め坐けれ然れども神の御世には今れ如わらず有  
らし御妹の味鈕神五百都鈕神鈕取らし最上川川遠炮然く通  
せりし水沫漉ちて流れ寄る泥凝結り此國は形なせりとふ其  
所思へは山方まけて國土の開闢し後は田地を惜らしとふ  
斯さまに宮敷しけめ御自其後事取持て此所に坐けめ相殿に  
清の湯山の主と坐す大己貴神少名彦神さへ副て二柱此所に  
在せり此山の麓の里に温泉は清の湯山ゆ下樋より通せりし  
かも清らけく潔白けぐ在て顯見蒼生の病をら救ひ給へれ然



れかも四方の病人斯在かも八面の戯士此所にしも來入集ひて明されは浴をしつゝ夕されは三比緒琴の喧しく賑はふ見れば宜しくも作りたりけり田川の國は

光賢

神姫清廟鶴城南山秀道環幽趣草風物催新天麗葩奇泉怪石應尋探藩田巷外春郊勝景貪看行不堪霞塢林丘芳草碧慘々女手携籠簾佳人巧樣掩青傘侍婢淡粧提小甌遲步杉幾兩々歡情結伴是三々飛香引蝶荷花婦憩石掬泉負米男售柵野夫衣短褐齋蔬村女絆襪盪遙聞府下寺樓鼓一達路頭爭力擔張氏疑奴驛馬卓家僮僕牧牛慘風流豪放貴公子挾彈擊丸驕駿驛曲逕留轡緩拾步長堤舉鞭歎趨趁十八連樓溫泉里溫泉唇沸神陵甜此鄉元是逍遙地羅野湯烟朝暮含維昔神姬風泳處當時白鷺魁相餞此

湯能使人壯健巡絡利眼除癩疾四方輻湊求澆浴日夜往來萬人涵捉著顛僂頻雜選張唇侈臉悉詭誦靈漢漉々注白玉忽漲膏賦爲汚泔美人浴罷着羅綺翠鬟不斂亂鬢鬢倡婦嬌姿婉新歌皓齒慘細腰輝錦帶眉黛映金簪仙袂翻斜裊舞容稱出藍轉顏忍笑齟目送街嬰媼橫陳情郎意少興半抱慙煙蒸沸湯氣沈麝結醜々東舍段羅語西園闋私繡鴛鴦琥珀枕比翼錦幃寢共傾奇偶齷分與合歡村寄歌白團扇寫情紫石潭捲簾深坐淚倚欄日暮悒高陽擅嗜慾輕薄專遊耽并舞醉泥醉行歌醜半酣何曾一日食孫殿猶貪婪恍爾華顏頰頰然潤面頰罰杯敢不許扶得還相合誰解爲狂藥酒兵飽求戡痴漢醉臥射顏童假寐睭桑門過取迷展季何不耽未覺高唐夢誰論分智慙渾是呈遊傲厭々樂且湛君不見由豆佐姬之垂跡山頭高聳磴階噤檜柏森羅杉蔭々楓槐翳鬱柳毳々大殿匍佹雲端出棟梁玉椿柱石拊承楣宛轉蛟螭躍達椽騰驥虬龍翻



時衡奮靈奔蹙，倚梁擢拳，猛鱗紺負，戴軒櫟，大象踞蓋，奔秦稅獅。  
子齡子蛻，構植熊磨，爪陸伏柎，側援張囅，楹上仙人，乘雲霧，練間武。  
夫飭金鏹，梧桐來鳳，松棲鶴，蘆荻招鴻，蒲留鶴，畫圖彫刻，邁希世神。  
威千古，赫靈々，再升磴，階數十步，漣藏宮殿，恠巖，靈薛，靈盤，曲藤，羅。  
結嫩葉，鮮花衆木，參三升，磴階樓臺，上營廟，巍然臨，答崕，襲谷，擁峰。  
古杉影，疑霜，怪浪，翠松嵐，蟠株，屈幹，梅千樹，花謝，花開，櫻桃，檜，俯見。  
青田數百頃，騷人到此，傾甕，壞舞，零壇，埠宜吟，嘯春，賞秋，興不可諳。  
又不見，長福，梵臺，重樓，閣山上，連房山下，庵講法，讀經，心耳淨，律師。  
博愛若天容，六書八體，丹青，技響，玉盤，聲屬，靜倏，寄謁，世間，遊說士。  
江山景物，入閑譚，天真老人，留十稔，常喜因緣，窺瞿曇，庭蔭，無塵，蘭。  
菴馨池，泉清冷，茗茶，昔時，默玄々，豐道託孔門，朋老聃。

羽陽大泉田川歌

天真德頤題

石清水記

羽大泉田川者，溫泉之勝地也。由豆佐姬垂跡也。山上曰櫻臺，置管  
神廟，櫻臺西青二道，其一北出，諏訪山，其一西南五十步，望石堂山。  
々頭孤高，松杉蔚然，山下之幽澗，巖如黑漆，壁岸有二口，噴出清水。  
迸突飛濺，落碧潭，輪回流布，過白砂，名曰石清水。岸上有八幡祠焉。  
其水石如庭池，假山幽小，可馴愛，泉最清麗，而味甘宜，煮茶宜，酒麵。  
宜漬菓，宜浸鱸，宜嗽口，洗盥，潭上樹林蔭翳，不甚炎暑，此土溫泉之  
勝境也。又有此泉，質神賜之靈水矣。傳言是昔源將軍義家以弓穿  
巖所得之泉也。亦山上舊營者將軍所旅也。自是西三里，橋原不二  
禪寺者，家衡之營跡也。絲是觀之，謂將軍所穿得泉，非無故矣。夫古  
跡紛々，不可辨明者，不夥乎。唯非此石清水耳哉。將軍與羽間苦戰，  
屢討賊，忠義貫天地，借使設其名，以仰其功，何不可乎。雖畫圖肖像，  
信而禮之，惡德而廢其名，耶往々遊于此者，憶山環路遠，溪流泥滑，  
而難輒通焉。今年山主周英上人及里長相議，而刈楚，拔棘，置磴，巨。



梁新作一遺僅不足百步五月十五日道既成於是里人相會開宴  
於此夕日天弊暑酷泉石添麗余相共飲耽渴清泉醉臥潭傍座間  
有道孝翁者肩余歸少焉酒將醒彷彿見左右翁之後亭也此翁亦  
愛此泉魁首而責記於余因記此言是歲天保丙申也

天眞願撰並書

初秋游田川

錦園小室由成

清境無塵候易秋小仙洞裏卜仙遊風來灑氣醉透動雨過炎氛吟  
後收盡日何妨成逸樂百年祗合占風流同人失却浮榮念敢信朱  
門勝酒樓

同上

鷺湖石澤龍浴

倚遍高亭晚突何林園數畝趣偏多石奇虎臥榮苔薜松老龍蟠掛  
醉羅醉餘快似雄風起浴後涼於驟雨過比隣晚覺青樓列歷々欄

前聽唱歌

同上

古香梅津之綱

吟杖相携向翠微溫泉洗熱試單衣問題詩句筆成陳暫較輸贏棋  
作園名利之場遙避跡烟霞此處澹忘機浴終林外寺鐘發伴得殘  
雲孤鳥歸

田泉客次

鹿峰西尾爲忠

浴游一日亦延齡地已仙靈泉更煖三伏望中無暑景滿山草木盡  
深青

題田川觀音閣

宏廬多田誠明

寺下溫泉注里中絃歌行樂自爲風香燼更有尋幽客慧眼高攀觀  
音閣

遊田川溫泉

東海山田文明

青山四周別乾坤翠樓客舍百戶村戶々娟々仙液注樓々紛々管



絃。浴後尋幽臥林麓。禽聲關々午睡足。起汲岩泉煮苦茶。閑開茶  
經對山讀。讀罷呻吟踏花行。坐弄流水濯足清。既歸客舍日加未。主  
人爲供綠笋羹。忻然飽食腹便々。或作小畫親筆硯。又展法帖縱閱  
覽。興來詩成題素絹。塵外從容無事纏。日如小年知不誣。可憐世上  
爭利客。百年瞬間似隙駒。

田川温泉歌

城南靈境青山紫。家々泉注温且清。能洗塵心使憂散。能治疾病使  
身輕。四時好景幽趣足。自宜曉暮與陰晴。琴平山上花如錦。林下春  
風响流鶯。磴道入雲慈悲閣。高杉森鬱杜鵑鳴。滿街紅燈涼秋夜。歌  
舞行樂月色明。皚々白雪埋樵路。一浴便疑春意生。又有清歌妙舞  
妓。誰是東山謝安情。

照井璞平

都留きたつ御嶽ふるしの山風に紅葉ちりしく伊豆佐賣の里  
沐浴せし時はとくさすをさして  
光賢  
なれもまたゆあみをなすかはとくさす田川の里にをちかへ  
りなく

田川温泉

光泰

湯出進めの潔白き神業には汚き病ひは伊か傳あらうふへし  
や

長胤

御年刈田川のい傳湯見てもこれ御業はやかて神の御名なり

星川清晃

軒つゝき色をあらそふ梅柳湯の氣にかすむ山本の里  
春の末つかた田川にありひて正面の温泉に浴みて

全



あみぬれは心の底も清まりて憂きも病もどく拂ふらん

二度はかりあみて歌などよみてやすみつゝ

全

たゞ一日あみてしおれど百千のやまひもどみにいえんと

思ふ

一夜やとりけるあくる朝とくおきてよめる

全

たゞならず湯の氣も臆かせる哉軒端の花にしらむ曙

夏のはじめ田川にあうひける時

清民

夏衣きつゝろあうふおもふとちいて湯の里に袖をつらねて

秋の半に田川にゆきける時霧ふかく立ふめたるを見て

田川邊は朝さりふかしく出る湯の煙りや空に立ちはるらん

由豆佐賣神社に参り拜み奉れば銀杏樹かうく

ふくみ坂を覆ひ杉むらさひたれば 星川清晃  
千はやふる神はいかきの千は木は幾千の世を榮え來ぬ  
らん

光賢

由豆佐賣の神の御山の銀杏の木は根さしうめん年のしらな

く

由豆佐賣神社の銀杏樹をよみ侍る 鈴木重良

神かきのろの千の木のやみ雲を子のみ開けかゝふるしるし  
なるらん

全

千はやふる神さ備にけりゆ都さめのいかきはふ五百枝しけ  
る千の木の

それより琴平山の花を見れば桃さくら立ちしりて



咲きみたれば 星川清晃  
まもります神は琴平ふと更に花のいろかを立まさりけり

卯は花や浴衣はすてふ田川山 近江 佐角

田川とは稻ふく風に湯のにはひ 江戸 東為防

人しらぬ秋や田川の落し水 紀伊 萍左

青くど山から晴るゝ早月哉 鶴岡 文二

入浴の折からに 全 永年

手つからに清水くみ来て新茶哉 全 永年

一瓢亭にて 全 永年

温泉烟りに一しほにはふ若葉哉 全 蘆汀

由豆佐賣神社 全 蘆汀

温泉壺まで浮ぶ銀杏の落葉哉 全 全

杜若咲くや湯尻に細流れ 田川 枕月

湯の里や夢も結ばす明やさき 鶴岡 旭林

田川温泉に浴して 全 羽泉

温泉の里や老鷲のきしどふる 全 羽泉

田川にて 全 竹蘭

鷺の巢に湯氣のつくくや田川山 全 竹蘭

田川より歸るさ一葉松にて 全 全

ふりむけは一葉の松や秋の暮 全 全

湯煙りに暮れて田川の月おぼろ 大山 狂花

温泉誌の後に題す

宴に待べる校書門に訪はるゝ粹客先づ應待に必要あるは行  
刺なり之れを意ふ温泉誌は猶ほ其名刺の如く更に人の其名



刺のみに賢愚の差別を判ち難きには似ず、緋けは必らず此温  
 泉の性質如何んを見るべく、又た痾を養ふもの唯とり泉質の  
 佳しと良く定まる價にのみは値せず別に大いに其資を爲す  
 もれ有りて、當年の佐田介石佛を喚起すも亦た温泉、國論を  
 唱ふの虧映おらじと思ふまで曰はく何に、云はく蟹と横道の  
 曲れるも、直くなるも皆なから敷へ導くも、細且精、浴客之れ  
 に由りて便し、士民之れに由りて利するもの蓋し少からざる  
 べし、而うして此著れ他郷人の手に成るは多として最とも其  
 勞苦を謝せざる可からざるなり、一言以つて題す

乙未彌生半羽陽尾城赤にかし庵に於て 松山狂花坊誌す

興歌

大山酒徒 なにかし庵

惚れて通へば千里も一里と云へり、況して吾在所より温泉地までは縦とへ作場道の

泥濘路と去へ長堰端を行けば僅かに二里なり、道路足の善悪何んの構ふ事や有る、  
 左れば吾れ蕩氣るに有らねど年齒既でに掛平の今日まで活きたり、死あば涙を手向  
 の水と懸けまくも妾し一人りを置去りに主は能う冥旅とやらへ啓行れしと泣いて吊  
 ふ於輕は有る筈、無いはお札に智慧許り、偕て歌ふらくも所訛りの方言歌、間違ひ  
 有らば酒が興する興歌とか宥し下され、但し又た下され無くも其處は何うとも、構は  
 ん界の大籠坊の厄介坊の狂花坊、エヘンく

遊治詞

おちよばやれ、ふつけでとどやれ、もどふつちや  
 〇〇〇〇のせきざし、みなやるでとど

注に云はくおちよばは大頂盤なり尻幅太とどきに取りて女を云ふ而うして通常に今ま  
 娼婦の名となり又た唯とり此地にのみ用ゐらるゝか如しやれは添詞ありふつけでと



どは傍寄れとなりもどふちや今ま少し此方への意、せまきとは小腰に植ゆる  
稻にて是れ若者の朝待ちなり

遊女詞

なだではし、ろげきものなど、なんぞはし

めぐがてもらへば、ろれでいずし

注に云はくなだではしは何んぢやぞイの意、そげなものなどは其様な物となりな  
んぞはしは何に致うばなりめぐがてもらへばは可愛がつてさへ貰へばなり

田川温泉誌終

料理大勉強強廣告

料理大勉強仕候ニ付各位(上中下)御意  
ニ應ス温泉構造改築落成尤モ浴方ニ  
適當ヲ斗ル温泉温度ハ百十度余ニ登  
ル室内清潔旅籠及木賃等ハ専ラ御便  
利ヲ旨トス  
右本誌出版ニ付改テ廣告仕候間一層  
御愛願ヲ仰ク

●副島伯爵來浴ノ節觀賞セラレ萬千ノ靈泉閣  
西尾老公來浴ノ節觀賞セラレ萬頃ノ待月樓

舊本陣

今野玉記



洋物類 和洋物小類 茶菓子 類 吳服太 物 荒物 下駄 下駄足

弊店儀各位諸君ノ御愛顧ヲ蒙リ日増盛大ニ相成難有奉萬謝候隨テ彌益大勉強仕候此度前記ノ物品廉價ヲ以テ精々相働キ販賣仕候弊店ニ於テ正實ト努力ヲ以テ廉價ヲ旨トシ物品ノ精撰直段ノ安直ハ弊店ノ主義ニ御座候間從來ノ如ク御安心アツテ舊ニ倍シ幾多ナリ共陸續御購求仰付被下度此段拜稟仕候也

出雲屋 今野 宇右衛門

弊店義來客諸君ノ御最良ヲ蒙リ日ヲ追ヒ繁榮ニ相成リ鳴謝ノ至ニ不堪候就テ今般更ニ職工四五名雇入諸君ノ御恩ヲ報センカ爲メ大ニ奮勵勉強致シ特別廉價ヲ以テ差上候間舊ニ倍シ御愛顧御引立アラントヲ希フ

疊屋 政吉

内湯 有

弊店儀各諸彦ノ御愛顧ヲ蒙リ日増シ繁榮ヲ來タシ添ク奉鳴謝候隨テ御得意様ノ御存之通り湯田川一等ノ地ニシテ目前ニハ正面ノ湯アリ又裏ニハ田ノ湯ニ入浴セント欲スル者モ大ニ便宜シ尙客人ニ對シテハ親切ヲ重シテ御取扱可申上候間舊ニ倍シ陸續御入浴相成度奉希上候頓首

見 屋

松田久左衛門



# 廣 告 石 倉 之 湯

弊店儀御各位様ノ御愛顧ヲ蒙リ御蔭チ以テ營業繁昌仕難有奉深謝候就  
テハ從來ノ御恩ニ御酬申度自今一層勉強仕御注意御取扱可申上候間何  
卒倍舊シ御眷顧御來浴ノ程偏ニ奉懇願候敬白

西田川郡湯田川温泉宿

石倉屋 庄司隼人

一石倉ノ湯ハ浴室入口ニ階段ナリ足ノ不自由ナル病者又ハ老人ノ出入  
ニハ甚ク便ナリ  
一石倉ノ湯ハ温度高ク浴室ニハ充分ノ光明ヲ取リシテ  
一石倉湯ノ効能●中氣●眼病●リウマチスニ尤モ適セリ

## 常

弊店是迄諸君ノ御愛顧ヲ蒙リマシテ日ニ増シ繁榮仕候處奉萬謝候隨  
テ弊店温泉之効能ハ○中氣○リウマチス○眼病○切創○打身○脚氣  
○微毒○

## 盤

室ノ敷且又他ニ比類無マ清泉ニシテ午前四時ニハ必ズ浴場ヲ掃除シ  
清情懇篤ニ取扱ヒ可申候間舊ニ増シ陸續御來浴之程伏シテ奉願上候  
頓首  
温度攝氏百十五度弱

## 屋

常盤屋 松田彦兵衛



# 開業夫勉強廣告

生事は迄東京市日本橋區南茅場町高塚太郎吉方ニ於テ理  
 髮營業罷在候處廿七年三月東京市日本橋區南組理髮奉行  
 司ヨリ一等職認定セラレ歸國シ改良器械ヲ整頓シ其他家  
 屋之構造ヲ美風ニシ廣ク來客ノ便ヲ量リ大勉強ヲ以テ營  
 業仕候間陸續御來光アラシマラセフ

明治廿八年一月一日

湯田川田ノ湯入口角

## 上草安任

# 一等内湯

## 家屋構造落成廣告

弊店儀往古ヨリ御得意様ノ御愛情ヲ蒙リ日増シ繁榮ヲ來タシ  
 添ク奉鳴謝候然ルニ不幸ニモ一朝燒失ニ罹リ一時休業中ノ所  
 深ク感謝候隨テ家屋新築間取り舊ニ倍シ及諸器械等ニ至ル迄  
 總テ新クニシ一層家業ニ從事シ丁寧ト深切ヲ重シテ各得意様  
 ノ御愛顧ヲ仰キ日増盛大ニ趣キ度候間不相變陸續御入浴ノ程  
 偏ニ奉願候草々敬白

湯田川由豆佐賣神社前  
 瀧ノ湯  
 佐藤ゆき江



湯内等一度温

弊店儀此迄各諸君ノ御愛顧ヲ蒙リ日ニ増シ繁榮仕候處奉萬謝候隨  
 テ弊店温泉ノ効能ノ儀ハ正而湯路略々同一ニシテ温度攝氏百十七  
 度共湧出スルノ對ニ他方ヨリ冠タリ又御取扱上ニ至テハ精々注意  
 ヲ加ヘ懇篤ニ盡シ舊ニ倍シ勉勵可仕候間陸續御來光ノ程偏々奉  
 上候謹白

司屋彦右衛門

此効能ハ眼病ニ尤モ通ゼリ

小間物 太荒洋賣 下駄類

口演

開店以來淺キハト歳分不成心内ニ商ヲ安ク酸河ノ甲斐アリキ  
 御得意様モ富士ノ山程テ旅言テハ無イ本間本間ト榮當ノ御入  
 來ニ相成弊店一同一重ハ愚カ七重八重實以テ難有仕合ニ奉存候  
 猶湯治場ハ兎角物高トノ御君様モ有之哉モ知不申候間他店ニ一  
 歩モ不讓特別大勉勵仕御得意様ノ御便宜ヲ專一ト仕マシレバ以  
 前ニ彌ヤ増シ御入來ノ程奉願候旨多キハ御座リト先ハ短キ  
 口上左様

湯田川上シヨリマツスク

ワ 商舖 本間和惣治 敬白



瀧湯

田ノ湯  
宮田屋

# 溫泉宿屋

各位様念御清適日増御愛顧ヲ蒙リ繁榮ニ相成離有奉鳴謝候就テハ御鴻  
恩ノ萬一ニ御願申上度一層懇切ヲ主トスルヘ勿論萬事御便利ニ御取扱  
申上候間倍舊陸續御來浴被下度奉懇願候敬白

田ノ湯續 宮田五郎左衛門

一弊店內湯ノ効能ハ眼病中氣脚氣リウマチス等ニ尤モ適セリ

一弊店內湯ハ地震後出量ヲ増シ温度ヲ高メ殊ニ瀧湯設ケアレハ善良ノ

内湯トナレリ

一弊店ハ過般裏正面ノ湯ト連絡シ廊下トヲ架設シ宿場内湯ノ如ク至極

便利トナレリ

## 廣告

弊店儀客諸君ノ御愛顧ヲ蒙リ日増ス繁榮ニ相成忝ク奉萬謝候

隨テ弊店內湯ノ如キハ從來ト大ニ異狀ヲ表シ

華氏温度モ登リ右ニ付家屋内湯モ修繕ス來浴ノ便ヲ斗リ

又客來ニ對シテ親切ヲ重ンズ御取扱可申上候御得意様ノ

御存之通り前ニハ正面ノ湯アリ裏ニハ田ノ湯アリ入浴セシニ  
尤モ宜シ舊ニ倍シ陸續御來浴相成度奉懇願候敬白

若水屋

大井多右衛門

一私儀農事業ニ付テハ尤モ心配セラレシ所ノ稻種ノ(モヤシ)方テ上達シ從テ  
植付ニモ安事ナキ様ノ一當溫泉ニテ發明仕候ニ付謹告候也



# 白鷺軒之湯

凡ソ人ハ衛生ヲ護ラサルハ無シト雖ヒ其功ヲ奏スルヤ温泉ニ御入浴  
ヲ第一ト言サルヲ得ス茲ニ當温泉ハ掘類泉ニシテ清潔無比ノ浴場ナ  
リ今般弊家所有湯ノ如キ從來ト大ニ異狀ヲ表シ華氏百十五六度ノ泉  
温ニ登リ隨テ諸成分モ増加スルノ衆評ヲ得其他宅地内所々ヨリ新湯  
ヲ湧出シ依之ニ澆蓋ノ造築可致見込モ有之自今一二ト算ヘラル、届  
指ノ内湯ト相成尙舊ニ倍シ御愛顧ヲ垂レ陸續御來湯奉希望白鷺軒屋  
號併モテ謹告仕候也

白鷺軒

大井七内

# 客室落成ニ付開業廣告

弊店儀從來宿屋營業罷在候處都合ノ爲メ一時休業セシモ今般客室ヲ新  
作シ或ハ間敷ヲ増設シ大ニ來賓諸君ノ御便利ヲ計リ開業仕候間倍尙陸  
續御來臨被下度偏ニ奉懇願候願首

羽前國湯田川温泉宿屋

田ノ湯前

前出屋

庄司はる

明治廿八年  
一月一日





廣 告

藥品洋酒類  
和洋小間物類  
茶菓子類  
荒物類  
下駄類

弊店備蓄ヨリ得意諸君ノ御愛顧ヲ蒙リ日  
増繁榮ヲ極メ忝ク奉萬謝候隨テ前書ノ物  
品増々大仕入ヲ致シ温泉場ノ榮光ヲ考ヘ  
又購求者ノ便ヲ量リ大勉強ヲ爲シ他ニ讓  
ラズ廉價ヲ以テ精品販賣仕候間多少ニ不  
拘陸續御購求アラシム事ヲ伏シテ奉懇願候  
敬白  
湯田川温泉  
大井彌五右衛門

田川温泉誌販賣所

構造修繕落成廣告

弊店儀往古ヨリ御得意諸君ノ御愛顧ヲ蒙リ日ニ月ニ隆盛ヲ來タシ  
誠ニ當旅店ノ幸福ヲ深ク謝ス。尙此後ハ大改良ヲ以テ座敷ノ間取  
リ舊ニ増シ丁寧ト懇篤ヲ旨トシ各諸君一点ノ曇リナク便利ヲ供ス  
茲來舊ニ倍シ陸續御來臨アラシム事ヲ乞フ隨テ常温泉ノ効能ハ  
ウマチスニ最モ奇効アリ他ハ正而ノ湯ト同一ナリ

金内孫左衛門事

金内三藏

福壽屋



# 最良温泉廣告

弊店備祖先以來温泉宿屋業相營ミ來リ候處專ラ正直ト懇切トヲ以テ御客  
 様ヲ取扱候爲メ頗ル御好評ヲ蒙リ四時御來客ノ絶ユル事無之之レ偏ニ御  
 愛顧諸君ノ賜ト深ク奉謝上候且ツ温泉室ハ最モ清潔ナルノミナラズ自然  
 ノ瀧湯アルヲ以テ浴客諸君ノ大ニ御賞譽ヲ蒙リ遂ニ家名ヲ瀧ノ湯ト稱セ  
 ヲル、ニ至ル客室ハ専ラ衛生ヲ基トシ日光ノ映射空氣ノ流通食物ノ調理  
 等ニ至ルマテ注意ニ注意ヲ加ヘ丁寧ニ御取扱可申候間陸續御光來ノ程偏  
 ニ奉希上候願首

湯田川村

瀧ノ湯元 大塚甚内

明治二十八年五月五日印刷  
 五月三十一日發行  
 明治二十八年

(定價金拾錢)

秋田縣平鹿郡橋手町百七番地

著者 田賀系 虎 吉

山形縣西田川郡鶴岡町新士町九番地

發行兼  
印刷人

早坂季四郎

温泉誌發行首唱者

庄司三男治  
 松田久吉  
 庄司富藏

大井七内  
 佐藤保太郎



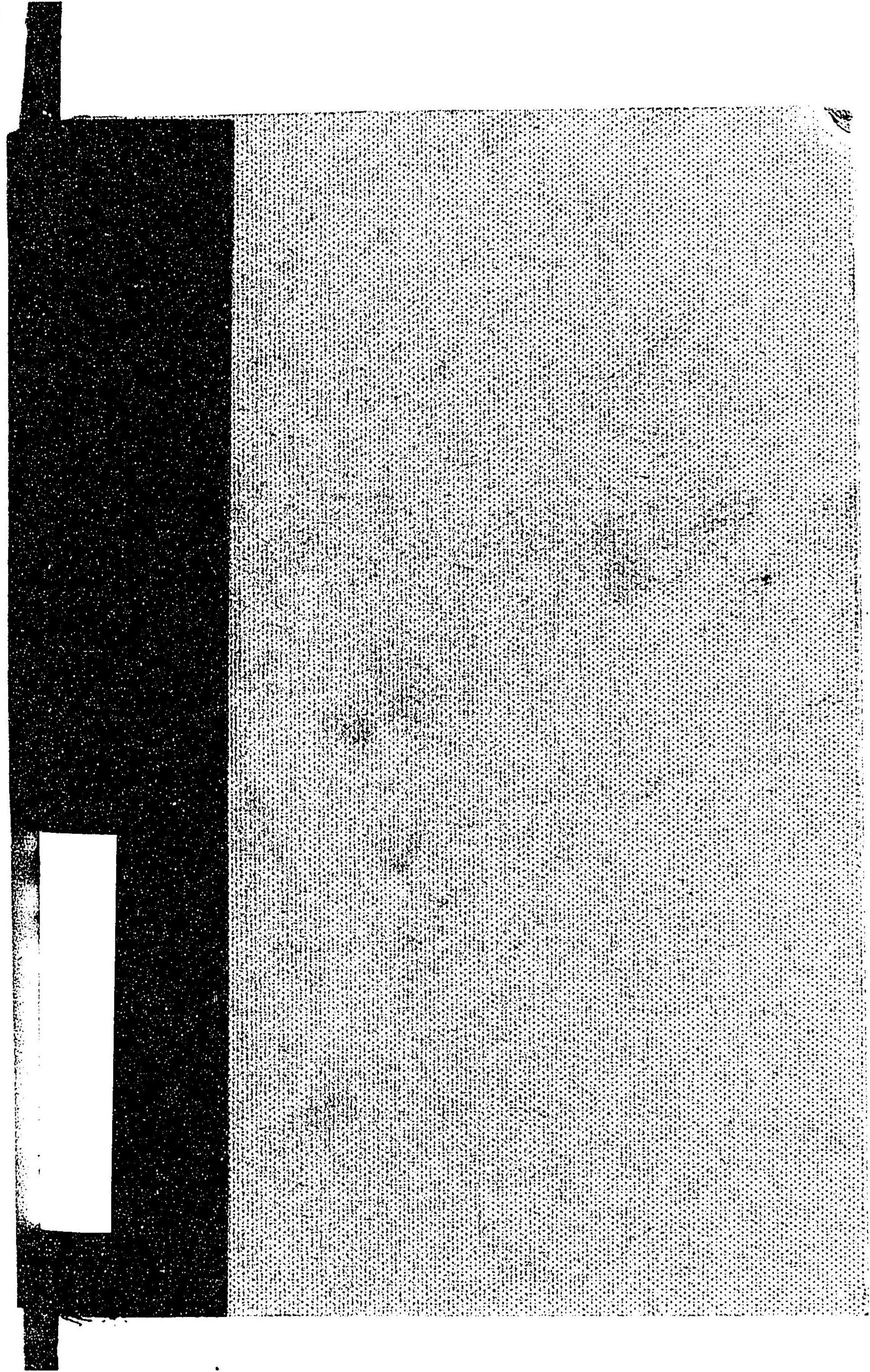
# 明治廿七年四月以後

鶴鳴館ノ印刷物ハ非常大廉價ナリ  
鶴鳴館ノ印刷物ハ約束期限ニ間違ナシ  
鶴鳴館ノ印刷物ハ意匠極メテ巧妙ニシテ鮮明美麗ナリ  
鶴鳴館ノ印刷物ハ校正嚴密ナルヲ以テ毫モ誤謬ナシ  
鶴鳴館ハ莊内地方活版所ノ親玉ナルヲ以テ如何ナル大  
部緻密ノ印刷物ニテモ決シテ約束期限ヲ違ハズ  
鶴鳴館ハ明治廿七年四月以後組織ヲ代ヘ大ニ業務ヲ擴  
張ス

羽前鶴岡一日市町

鶴鳴館







特 69

97

湯田川温泉誌

国立国会図書館

202600-000-6

特69-97

湯田川温泉誌

田賀糸 虎吉/著

M28

EDE-0158

